

WINの連帯感を 一歩先のステージへ

WIN-Global/WIN-Japan 会長

小川 順子氏

■おがわ・じゅんこ

1952年9月26日生まれ、神奈川県横浜出身。1975年3月/慶應義塾大学文学部西洋史学科卒、同4月/日本ニュークリア・フュエル入社、94年/同社総務部広報課担当課長、98年/日本原子力発電入社・広報室次長から広報主幹(副部長)を経て、現在、広報室調査役。また、この間、WIN-Global常任理事、WIN-Japan会長を歴任、2004年5月にWIN-Global会長就任。原子力委員会市民参加懇談会専門委員も務め、講演実績多数。

■インタビュアー/中 英昌(本誌編集長)



小川さんは、原子力に携わる女性の世界組織であるWIN(Women in Nuclear)-Global(会員:57カ国・約2,000人)の常任理事・WIN-Japan会長として、5月には念願だったWIN-Global年次大会の日本初開催を実現されたばかりか、その会長に就任、1つの国際組織の頂点に立たれました。何よりもまず、原子力ではまったくの素人で無名だった小川さんが、どのような経緯で今日のような活躍をされるようになったのかに大変興味があります。そもそも、小川さんが慶應義塾大学文学部からどうして核燃料加工の専門会社、日本ニュークリア・フュエル(JNF)に就職されたのですか。

わたしが大学を卒業した1975年は、73年の第1次オイルショック後で非常な不況だったうえ、当時は4年制大卒女性の就職は一生のものでなく腰掛に近いのが社会風潮で、大企業はほとんどが門戸を閉ざしていました。つまり、就職先が見つからないのです。そこで、出身地で居住区だった横須賀で探したところ、たった1社、JNFが4年制大卒女性を募集していました。JNFは当時、米国GEが資本の40%を保有する外資系企業で公文書も英語だったため、秘書業務を中心に英語のできる女性を必要としていました。つまり、なぜJNFを選んだかというより、

そこしか選択の余地がなかったのが現実です。

でも、原子力にまったく関心がなかったわけではありません。中学校が横浜国大付属鎌倉中学で、実験的カリキュラムを組んでいた関係で、修学旅行はお決まりの奈良・京都ではなく、「これからはエネルギーが大事」ということで、東海村へ行き、日本原子力研究所の動力試験炉(JPDR)など原子力施設を見学、フィールドにはすごく感激しました。また、夏休みには原爆の日ということで必ずその悲惨さを勉強していましたので、原子力には恐さと素晴らしさの両面があることを常識と



しては知っていました。会社訪問して、おぼろげながら「これはそんじょそこらにはないユニークな仕事。面白そうだ」と思った次第です。

入社後はどのようなキャリアを積まれたのですか。

最初は品質保証の検査部に配属されました。ウラン燃料棒の金属チューブを検査する部署で、この現場に入り、直接ものにかかわったことが今でもすごく良かったと思います。燃料工場なので、正に原子炉の中心部・ハート（エネルギーの元）を作っていると思いました。当時は若かったし、そうした使命感が強く、自分が最初に検査にかかわったチューブ（燃料棒）が出荷、装荷され、約4年の寿命を終え原子炉からちゃんと出てくるまでの5年間ぐらひはこの会社にしようと思いました。

このように最初は新人教育で現場に配属されましたが、次に外人秘書の退職に伴い、品質保証部長（米国人）と日本人部長の秘書として事務所内勤務となりました。でも、部長の指令を伝えるということを実

に、どんどん現場に入り込み、ますます興味がわいてきました。原子炉を見ても原子炉内はブラックボックスで何も分かりませんが、燃料加工工場は、ウランが加工されてお菓子の^{すべ}ように焼きあがってくるのが見えるし、「工場が生きている」という感動がありました。

そうこうしているうちに、時々、学校の先生や地元の人たちが工場見学に来ることがあり、たまたま、「わたしに案内させて下さい」と頼んだら「いいよ」と、簡単に受け入れてもらえました。それまでは技術者が案内していたのですが、一般の人にはどうしても難しく、自分は素人だけ現場を^{すべ}実際に歩いて、その都度疑問を現場の人に聞いて^{すべ}説明し、面白いと思ったことを誰かに伝えたいと思っていました。これが好評で、また、間もなくチェルノブイリ事故が起きてからは、「小川は秘書より来客対応の方が向いているのではないかと、初のお客様対応担当として上司がすすめてくれたので

原子力PAの女性のプロへの道を極めていかれる始まりだったわけですね。

当初、JNFには5年ぐらひはいよ^{すべ}うと思っていましたが、いろいろな仕事を通じて国際関係やGEとやはり株式会社である日立、東芝の^{すべ}関係や資本の論理とかを体験的に学んで社会的に大人になるにつれ、「仕事って面白い」と感じました。また、

原子力の現場の人たちは実にひたむきに頑張っていますが、自分たちのやっていることを他人にうまく伝える術はない。その点、わたしはそのことを一般の人にうまく伝達するというコミュニケーターとしてのノウハウを積み、原子力エネルギーの素晴らしいところを伝えていきたいということ^{すべ}で今日までできました。

原子力PAは、終わりのない根気仕事です。いくら一生懸命やっても、小さなトラブルや事故は起こり、常に振り出しに引き戻されてしまう要因がいっぱい転がっています。わたしは、「これは意味がない」と感じた時のあきらめは早い方ですが、これまでなぜあきらめ^{すべ}ないできたかという^{すべ}と、やはり「原子力はエネルギーとして不可欠。だからやる意味がある」と、信じているからです。

原子力関連の現場から秘書業務、そしてPAまでの流れは分かりました。さらに、WINとの出会いはどういう関係からですか。

1993年に国内でWEN（Women Energy Network）を設立する時に、わたしは発起人の1人として碧海西癸代表と頑張っていました^{すべ}が、これと時を同じくして欧州でWIN設立の動きがあり、個人会員としてWINにも籍を置きました。そして、WIN-Globalの国際会議に参加しながら、日本は世界第3の原子力大国なのに、日本で国際会議を開けないのは残念だし、世界の中で日本の貢献を示したかった。それにはまず、

WIN-Japan を設立する必要があると思います。

しかも、WIN-Japan を設立するには電力会社、メーカーの協力がが必要です。JNF の一社員だったわたしには、WIN-Japan をつくる力はなかったのです。ところが、そうして悩んでいるうちに、たまたま、「日本原子力発電で働きませんか」と、声をかけていただきました。わたしが心に秘めてきた WIN-Japan の設立は、ひょっとすると原電に入社することで可能になるかも知れないと思い、「こういうことがやれますか？」と聞いたら、好意的な答えをいただいたので、それもひとつの動機となって原電に入社する決心をしました。事実、これが大きな飛躍台となり、同じ志の仲間と協力し、2000年に WIN-Japan の設立にこぎつけました。

そして今回、WIN-Global 年次大会の日本初開催という長年の夢を実現されると同時に、会長就任という大役も引き受けられました。日本開催の意義と成果についてお話し下さい。

一番嬉しいことは、今回の世界大会開催は100人を超す WIN-Japan 会員のすべて手作りでやり遂げ、世界17の国・地域から約200人が参加してくださったことで、日本人女性がこれほど素晴らしい資質を持っていることを世界にアピールできたことです。わたしがグローバルの会長に推薦されたのも、日本大会がプログラムの一つひとつにまできめ細

かい配慮があり、あわせて組織としてのまとまりや実行力の高さを世界が評価し、日本に任せても大丈夫ということになったからだと思います。この実力は必ず原子力広報の分野でも発揮できると思います。

また、今回のハイライトは WIN-Global の国際会議史上、最大のイベントと言っても過言でない「国際市民フォーラム」を開き、日本全国から公募で主婦層はじめ450人もの方々が参加、世界の原子力界で頑張っている代表的な女性たちと直接意見交換できたことです。会議の後、たくさんの方から「有意義だった」、「楽しかった」のメールをいただきました。わたしは、カルニノ前会長が言われたように、「日本の人たちはもっと自信を持って原子力のメリットを言うべきだ」という点に共感しました。日本人の国民性と欧米とは違う面もあるとは思いますが、正しくメリットを伝えることに遠慮してはいけないということを感じました。

さて、では WIN-Global 会長としての抱負、小川さんの次の目標を伺いたい。

まず、WIN の顔として世界における WIN の知名度を高め、会員が活動しやすい土壌をつくっていかねばいけないと思います。それは WIN-Japan の時も同じでした。例えば、原子力学会といえば、その活動に参加することを社内で反対されることは少ないでしょう。原子力学

会がそれだけの知名度とステータスを確立しているからです。WIN もそのような方向を目指して努力することが会長の役割だと思います。WIN が原子力の理解促進分野で有用であり、人材を育てる場として必要な団体という認識になれば、会員の人たちも活動しやすくなるし、活動の喜びも倍化します。

また、WIN-Global の事務局はロンドンの WNA (旧ウラン協会) にありますが、ここ数年休眠状態でした。しかし、事務局職員が今回初めて日本大会の誘いに応じ世界大会に出席し、事務局として仕事する意識を高めてくれました。ですから、まずは事務局の活性化から着手したいと思います。WIN のニューズレターを作り、また、インターネットのホームページも更新したい。そのため材料はどんどん出していきます。

さらに、その次は可能な限り、世界各国に積極的に発信していきたい。そのことが現地のマスコミに取り上げられることで、WIN のアピールにつながると思うので、この1年はそれに力を注ぎます。また、来年の WIN 世界大会はチェコで開催されますが、WIN-Japan のメンバーに1人でも多く参加していただきたい。WIN-Japan が WIN-Global のリーディングカントリーとして、世界にも貢献することで、WIN-Japan 会員とともに成長していきたいと思います。わたしの任期中に、そこまでは持っていきたいと考えています。◆